

研究ノート

立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおける
英語再履修教育について*

——必修英語科目で単位を習得できない原因と対策 その2 (第3期)——

上 田 眞理砂[†]

I. はじめに

立命館大学びわこ・くさつキャンパス (BKC) における再履修英語科目の経緯

II. 現状

1. 概要：受講登録者総数，単位数，開講クラス数，受講定員，担当教員数，時間割配置，評価方法，学部の履修条件
2. 受講者数と単位取得率
 - 2-1 第3期：2010年度以降
3. 問題点と対策
 - 3-1 必修英語科目の単位未習得原因
 - 3-2 再履修英語科目の単位未習得原因

III. おわりに：到達目標

I. はじめに

BKC における英語再履修科目の経緯

2002年4月，本学の経済学部・経営学部・理工学部の3学部統いで，必修英語科目の単位未習得者を対象に，英語の基礎学力の充実を図るため，再履修科目として「実践英語」が開始された。「実践英語」は，必修英語科目の単位回復科目であり，重複受講が可能な科目である。2005年度からは，情報理工学部（2004年度開設）が加わり4学部統一科目として展開されていたが，2009年度をもって「実践英語」は閉講され，2010年度からは「再履修英語」が開講されている。なお，混乱を避けるため本論では「実践英語」という呼称は用いず「再履修英語」で統一している。2015年度からは，同年度より新設された大阪いばらきキャンパス (OIC) へ，経営学部が移転したので，BKCでは現在，経済学部・理工学部・情報理工学部の3学部統一科目として「再履修英語」が開講されている。

*この研究ノートは，上田眞理砂，(2016)．立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおける英語再履修教育について—必修英語科目で単位を習得できない原因と対策その1 (第1期および第2期)—，立命館経済学，第65巻，第5号，314-325．の続きである。

[†]立命館大学 教授，Ph. D. (言語文化学) marisa@ec.ritsumei.ac.jp

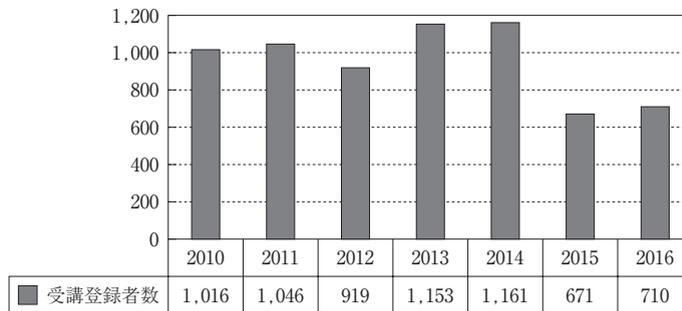
Ⅱ. 現 状

1. 概要：受講登録者数，単位数，開講クラス数，受講定員，担当教員数，時間割配置，評価方法，学部の履修条件

受講登録者数

まず初めに，この科目は重複受講が可能な科目であるため，例えば1人で月曜日～金曜日までの各曜日5限のクラスを受講登録し，受講することも可能である。その場合，受講登録者数は「5人」となり，受講登録者数＝受講者の実数ではないことを明示しておきたい。2010年度～2016年度までの受講登録者数は以下の通りである。以下の図1で示すように，2010年度～2014年度の期間は，毎年約900～1,100人前後で推移していた。2015年度に経営学部がOICに移転したので，2015年度以降の受講登録者数は約700人と減少した。

図1：2010年度～2016年度「再履修英語」受講登録者数



単位数

次に単位数であるが，「再履修英語」の単位数は1である。現在，各学部とも卒業に必要な単位数は124である。そのうち，卒業に必要な英語科目の単位数は，以下の表1が表すように，所属学部や所属学科，履修言語コースによって異なる。

表1：2016年後期現在の各学部の卒業に必要な英語科目の単位数

学 部	卒業に必要な英語科目の単位数
経済学部	4～16
理工学部	6～10
情報理工学部	10
経営学部（2015年度にOICに移転）	4～16

開講クラス数

2016年度の「再履修英語」の開講クラス数は18で，前期10クラス（月曜日～金曜日，各曜日2クラス）・後期8クラス（月曜日・火曜日・木曜日は各曜日2クラス，水曜日・金曜日は各1クラス）が開講されている。

受講定員

各クラスの受講最大定員は50名である。

担当教員数

2016年度前期は10名、後期は8名の教員が担当している。情報理工学部の専任教員1名を除き、それ以外の全クラスを非常勤講師が担当している。通年で、「再履修英語」を担当している教員は4名の非常勤講師である。

時間割配置

2016年度現在、全ての「再履修英語」は、月曜日から金曜日の毎日5限（16:20～17:50）に開講されている。

評価方法

2016年度、「再履修英語」において単位を取得するためには、以下の2つの条件を満たす必要がある。

- 1) 全15回講義中、最低2/3(=10回)の出席
- 2) 100%満点中60%の取得

15回の講義中、基礎的な英語学力を確認するための試験が3回実施される（10%×3回=30%）。加えて、テキスト内容の理解と語彙・文法知識の定着を確認する小テスト（あるいは課題）が5回以上実施され、（5%×5回=25%）。さらに、出席状況を評価の対象とし、1週（1回）出席ごとに3%が加算される（3%×15回=45%）。「再履修英語」の場合は、必修英語科目とは異なる評価基準が適応されており、評価はCまたはF（不合格）のみである。

必修英語科目の場合も、全15回の講義の内、最低2/3(=10回)の出席が単位取得に必要不可欠であるのは同じであるが、100%満点中60%以上であれば成績や受講生の所属レベルによってA+、A、B、Cの4つの評価に分かれる。経済学部の場合、Upper Intermediate レベルとIntermediate レベルの受講生は、90%以上でA+、80-89%でA、70-79%でB、60-69%でCと評価される。Pre-intermediate レベルの受講生は、原則的にA+評価は無しで、60-69%でC、70-100%でBと評価される。

学部の履修条件

まず経済学部において、国際経済学科の学生は、必修英語科目の単位が取得できなかった場合、翌年度以降に原級復帰し、（翌年度以降に同一のクラスを受講すること）その科目の配当回生と一緒に必修英語科目を受講しなければならないが、「再履修英語」は4回生になるまで履修登録できなくなった。経済学科の学生も同様に、必修英語科目の単位が取得できなかった場合は2回生進級時に原級復帰しなければならない点は同じであるが、経済学科の学生は、3回生進級時に初めて「再履修英語」を履修登録できるという条件に変更になった。

経営学部において、国際経営学科の学生は、経済学部国際経済学科の学生と同様に必修英語科目の単位が取得できなかった場合は原級復帰し、その科目の配当回生と一緒に必修英語科目を

受講しなければならず「再履修英語」は4回生になるまで履修登録できなくなった。また、経営学科の学生は、経済学部経済学科の学生と同様に、必修英語科目の単位が取得できなかった場合は、2回生進級時に原級復帰し、3回生進級時に初めて「再履修英語」を履修登録できるという条件に変更になった。

理工学部と情報理工学部の両学部において、2回生の学生は「再履修英語」は履修登録できず、原級復帰が原則となった。「再履修英語」は3回生から履修登録可能であるが、単位を取得できなかった科目が2回生配当科目なら「再履修英語」を履修することはできず原級復帰しなければならない。単位を取得できなかった科目が1回生配当科目の場合のみ「再履修英語」を履修登録できるのである。

2. 受講者数と単位取得率

2-1 第3期：2010年度以降

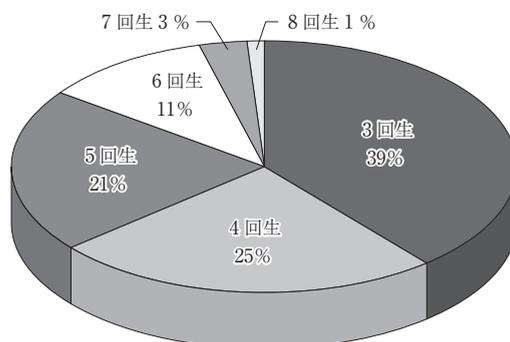
本論において、評価方法が変更された2010年度以降を第3期とする。この期間は、以下の図2が示すように、受講登録者全員に占める3回生の比率が一番多く、平均受講登録者数比率は39%、次いで4回生は25%、5回生は21%であった。2回生と3回生の平均受講登録者数比率の合計は64%と、第1期および第2期同様、やはり過半数を占めている。このことは第1期および第2期同様、学部を問わず卒業に必要な必修英語科目の単位を早い段階で取得し、4年間で卒業できるよう、可能な限り不安要素を取り除き、安心したいという受講者の心理が大きく作用していると考えられる。

しかし、4回生になるまでに卒業に必要なこれらの英語科目の単位を必ずしも全員が取得できず、全受講登録者数に対する4回生受講登録者数の平均比率は25%と第2期同様、受講者の実に4人に1人が4回生であった。5回生以降の受講登録者もやはり存在しており、全受講登録者数に対する5回生受講登録者数の平均比率は21%であった。全受講登録者数に対する6回生・7回生受講登録者数の平均比率は、それぞれ11%と3%であった。8回生になると、この回生に達するまでにほとんどの学生が卒業することもあって、全受講登録者数に対する8回生受講登録者数の平均比率は、データ上では0%であるが、2010年度に24人、2011年度に6人、2012年度に9人、2013年度に12人、2014年度に12人、2015年度に2人、2016年度に人もの受講登録者が実際にいた。以下の表2は、第3期各年度の受講登録者各回生の比率を、図2は第3期受講登録者各回生の平均比率を示している。

表2：第3期 各年度の受講登録者各回生の比率

回生比率(%)	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
1回生	0	0	0	0	0	0	0
2回生	0	0	0	0	0	0	0
3回生	39	40	38	50	39	39	37
4回生	25	30	40	27	40	35	39
5回生	21	13	11	17	14	20	14
6回生	11	12	5	3	5	4	8
7回生	3	5	4	2	2	2	2
8回生	1	1	1	1	1	0	0
合計	100	100	100	100	100	100	100

図2：第3期 受講登録者各回生の平均比率



「再履修英語」科目が、経済学部・経営学部・理工学部・情報理工学部の4学部共同開講（2015年度からは経営学部がOICへ移転したため、現在BKCでは経済学部・理工学部・情報理工学部の3学部共同開講）であるということも考慮に入れても受講登録者数は非常に多い。かつては受講登録者数が4,300人を超える非常事態となったが、様々な対策が功をなし、2012年度には919人と開講以来初めて1,000人以下となった。しかし、翌2013年度以降は2年連続で再び1,000人以上に増加した。「再履修英語」科目は、いくつかの問題点を抱えており、次のセクションでは、その問題点と対策について述べたい。

3. 問題点と対策

3-1 必修英語科目の単位未習得原因

このセクションでは、必修英語科目の単位未習得原因として考えられるいくつかの要因と、その対策について考察する。

筆者は本学で1995年から教鞭をとっているが、必修英語科目で単位を取得できない最大の理由は、英語そのものの実力や能力ではなくて、実は「出席率の低さ」であると常々感じていた。15週間というごく限られた短期間において、単位取得に必要な最低回数である10回すらも出席でき

ないことが、最大の理由であると感じていた。というのも、筆者が「再履修英語」を担当していた2009年度、受講生に単位を取得できなかった元の必修英語科目教員名を学生に尋ねても、「メガネをかけていた」とか「男性だった」などと言うばかりで、大多数の学生は答えることができなかった。彼らは、ほとんど出席していなかったので、担当教員名すらわからなかった。筆者が常々主観的に感じていることを、客観的なデータで裏付けたかったので、2015年度後期開講6クラス300名の「再履修英語」受講生に Appendix 1 のようなアンケートを、また「再履修英語」担当の5名の教員に（1人の教員が2クラスを担当していたので、教員数とクラス数は合致しない）Appendix 2 のようなアンケートに協力要請した。受講生の有効回答数は、100名分、教員の有効回答数は4名分であった。以下の表3は、受講生からのアンケートを集計した結果である。なお、有効回答数は100であったが、全員が全ての項目に回答していたわけではないので、合計が100とならない項目もある。

表3：必修英語科目の単位未習得原因についてのアンケート集計結果

回 生					性別		アルバイト		部 / サークル活動		居住形態	
3	4	5	6	7	男	女	している	していない	している	していない	実家	一人暮らし
37	35	21	5	2	77	12	65	32	30	64	28	64

〈原因その1：出席不足〉

Appendix 1 質問番号6に対する回答から判明した必修英語科目で単位を取得できない最大の理由は、やはり出席不足によるものだった。それでは、なぜ彼らは必修英語科目に出席しない、あるいは、できないのだろうか。アンケートには様々な理由が書かれていた。

- グループ・ワークが苦手
- 宿題をしていない。
- 寝坊・遅刻
- 人間関係
- アルバイトでの疲れ
- 生活習慣の乱れ
- 精神的な病気に罹患した。
- 体調を崩した。
- パニック障害に罹患した。
- 深夜に友人と遊んでいた。

出席を促す方法として、教員からのアンケート結果には、以下のような対策を講じているとの回答があった。

- manaba+R*やメールで出席を促す。
- 教員と職員の連携
- クラスメートに声をかけてもらう。
- しつこく（教員から）出席するよう言う。

しかし、同時に大学生に対してそこまでする必要があるのかという疑問を抱いているとの回答もあった。

出席不足の要因のひとつであるアルバイトについては、少ないもので週に1回1.5時間、多い

* 予習・復習や講義の補足など授業を支援する立命館大学の e-learning ツール

ものでは週に5回30時間という受講生もいた。週に1回1.5時間程度なら学生の本分である勉学に支障がでる可能性は低いが、週に5回30時間も労働すれば、単純に計算しても1日に6時間の勤務であり常態化すれば、勉学に支障がでる可能性は極めて高いと思われる。それを裏付けるかのように、アンケートには以下のような回答があった。

- テスト前日に勉強する時間がない（アルバイト）。
- テスト未受験（遅刻，寝坊，体調不良）

出席不足の要因のもうひとつは、生活習慣の乱れが考えられる。上記の表3から分析できることは、一人暮らしの男性でアルバイトをしており、なおかつ、サークルや部活動に参加していない受講生は、必修英語科目の単位を非常に落としやすい可能性が非常に高いことがわかる。一人暮らしをすることにより、朝起きて夜寝るといった基本的な生活習慣が乱れ、昼夜が逆転してしまい、朝起きることができないのである。また、単に朝起きることが、できなくなるだけでなく、そのような生活習慣では体調管理も疎かになることが容易に想像できる。それを裏付けるかのように、アンケートには以下のような回答があった。

- テスト未受験（遅刻，寝坊，体調不良）

個々の受講生の基本的な生活習慣の乱れに対する対策は、基本的に自己責任であり、大学の教員の守備範囲ではないと筆者は個人的に思っている。但し、受講生が何らかのアドバイスを求めに来た時は、精神誠意、親身になって相談にのるべきであると思う。

表面的には、「出席不足」が最大の原因であるが、その理由は大きく分けて以下の2つであると考えられる。



出席促進対策の一つとして、現在、全ての「再履修英語」は、他の必修科目と重なることはなく、出席し易い時間である、月曜日から金曜日の毎日5限（16:20～17:50）に開講されている。2009年度までの「再履修英語」の開講時限は、全てが5限ではなく、2限や3限といった他の必修科目と重なる可能性の高い時間割配当になっていた点が改善されている。

出席促進対策の一つとして、筆者は、開講第1週目の初回講義において、出席は毎回取ること、遅刻の定義（筆者のクラスでは、講義開始後20分までの入室）、遅刻3回で1回の欠席として扱われること、本学の全学部の語学科目では、全15回の講義の内、最低2/3（10回）の出席が単位認定の前提条件となっていることをクラス・ルールとして説明・印刷・配布し、出席に関して情報の周知徹底を図っている。さらに、筆者は担当するクラスごとにメーリング・リストを作成・利用

しており、毎回講義後、このメーリング・リストを介して次回講義進行予定内容、持参物、課題、試験情報などの詳細を、当該クラスの受講者全員に送信している。

〈原因その2：勉強不足〉

必修英語科目で単位を取得できない原因として、明らかに勉強不足がある。それを裏付けるかのように、アンケートには以下のような回答があった。

- リスニングが苦手
- テストの点数の低さ
- 文法が理解できない。
- 英語が苦手
- 単語を知らない。
- TOEIC® を定刻までに終了できなかった。
- 予習・復習をしていなかった。
- TOEIC® のスコアの低さ（200点）
- 授業についていけなかった。
- ぎゅっと e の配点が 0 点だった。

学習を促す方法として、教員からのアンケート結果には、以下のような対策を講じているとの回答があった。

- 補充課題を与えることにより、不足分を補う機会を与えている。
- 小テストの点数はすぐに通知し、現状を把握させておき、いつでも補充課題を受け付ける。
- 追加課題に与えられる点数を明示しておく。
- 小テストの点数が 6 割に満たない場合は追加課題を課し、提出すれば 6 割の点数を取得したと認定する。

また、以下のような提案もあった。

- 一部の大学で実施されている補習授業や上回生によるチュートリアルやピアティーチングを実施する。

色々な対策や提案の回答があったが、同時に「教員側から学生一人一人に対し、課題提出を求めるなどの働きかけは必要ない」という意見もあった。次は、2 つめの要因である「勉強不足」が密接に関連している、受講生のやる気、つまり動機の低さについて記述する。

〈原因その3：動機の低さ〉

必修英語科目で単位を取得できない原因として勉強不足があったが、密接な関係にある「動機の低さ」が考えられる。それを裏付けるかのように、アンケートには以下のような回答があった。

- やる気の無さ，意志の弱さ，忍耐力の無さ
- 課題の未提出
- 危機感の欠如
- 授業のやり方が嫌だった。
- 社会に出た時に必要となるスキルを教えているとは思えず，講義内容に対して意欲的になれなかった。

動機づけをする方法として，教員からのアンケート結果には，以下のような提案があった。

- 教科書選定の際，学生のレベルとニーズ，興味に合ったものを選ぶ。

筆者は，この提案は現実的に難しいと感じている。通常，教科書選定業務は経済学部においては11月末に決定される。次年度の1回生は，その時点ではまだ高校3年生で入学すらしていない。また，現1回生であっても経済学部の1回生は約800名在籍しており，レベルもUpper Intermediate, Intermediate, Pre-intermediateの極めて大雑把な3段階しかない。最大公約数的な可能な限り多くの受講生が興味を持つだろうと思うような教材を我々は選択するが，当然のことながら全ての受講生のニーズや興味に合った教科書というものは，存在しないと筆者は考えている。実際に講義が始まってみないと本当の意味での学生のレベルはわからない。

しかし，筆者はプロとしての意地から，選んだ教科書を目の前にいる学生のレベルとニーズに合わせて，できるだけ興味を持たせるように，自身の海外での経験談や映像，写真，音声，実物資料などを講義で用いている。あの手この手で，受講生に90分が過ぎるのが早いと感じさせるように，入念に授業計画や準備をすることで，教科書と受講生の「溝を埋め」，「つなぐ」ことを筆者は意識して実行している。

〈原因その4：優先順位の判断ミス〉

以下の理由は，一見すると「優先順位の判断ミス」が原因であると，全ての人が思うことではないかもしれない。

- インターン活動のため，時間が取れなかった。
- 部活動週に：文科系1回1時間～7回56時間
運動系1回3時間～6回12時間
- 就職活動のため

まず本学ではインターンシップは2回生からの配当である。業種は多彩で，金融，保険，メーカー（食品，医薬品・化粧品・化学，電気・機械・精密・輸送機器等，文具・事務機器），物流，商社・卸，建設，交通（鉄道・航空・バス），インフラ（電気・ガス・水道），不動産，マスコミ，情報処理・システム・IT，百貨店・ストア・専門店，ホテル・レストラン・外食産業，旅行・レジャー・アミューズメント，人材サービス，コンサルタント・高度専門職，その他サービス業，

福祉・医療，NPO法人，公社・官庁・団体，教育，スポーツなどの分野があり，27の受入機関がある。期間は，最短で5日，最長で31日間である。

インターンシップ希望者は，プログラムの内容などを確認し，自分に合ったインターンシップ先を選ぶのである。当然，必修英語科目や他の科目のことも勘案すべきである。必修英語科目を犠牲にして，インターンシップ活動を優先すると決断したのは本人であるので，優先順位の判断ミスということになる。これだけの種類と受入期間があるのだから，「必修英語科目や他の科目に支障が出ないようなインターンシップ先を選ぶ」という選択も可能であったと筆者は考える。

次に，部活動は筆者は重要であると考えている。というのは上記の表3で明示されているように，部活動をしていない受講生に必修英語科目の単位未習得者がおおいのである。これは，「大学に来る」「人間関係が構築される」「情報交換や収集になる」などが単位取得に間接的に作用していると考えられる。しかし，同時に部活動が原因で必修英語科目の単位が取得できなかったとする受講生は，明らかに優先順位の判断にミスがあったといえるだろう。筆者は，部活動も学生時代にはとても重要であると思うが，必修英語科目の単位を落としてまでも，優先すべきことではないと考えている。「やりたいこと」と「すべきこと」があれば，まず後者を優先するべきではないか，と筆者は考える。

〈原因その5：行政的理由・学部特有の評価方法〉

筆者が全く予想しなかった回答もいくつかあった。

- 転学（前の学部での不足分）
- 途中から上のクラスに移動したため（経済学部）。
- 必修英語科目では英語で発言しないと平常点をもらえない仕組みになっている（理工学部）。

他学部から転部した受講生が，単位不足分を「再履修英語」で補う現状の制度は，筆者は個人的に改善すべきだと思う。というのは，前述の評価方法のように「再履修英語」ではF（不合格）か，C（合格だが最低レベル）の2つの評価しかないのである。他学部から転部した受講生には「再履修英語」ではなく，必修英語科目を受講できるよう改善すべきであると筆者は考える。

途中から上のクラスに移動した受講生については，異動先のレベルが上のクラスについて行けず「再履修英語」を受講することになったと考えられる。このような場合は，異動先のクラス担当教員と情報を共有することにより，移動後の補佐が望ましいと筆者は考える。

必修英語科目では英語で発言しないと平常点をもらえないという理工学部独自の基準であるが，15週間もあるのだからその期間中，クラスメートが発言する内容を聞いて，自分も同様に発言してみるとか，担当教員に相談に行くなど，受講生自身の努力でどうにでもなることであると筆者は考えている。

次のセクションでは，再履修英語科目の単位未習得原因として考えられるいくつかの要因と，その対策について述べたい。

3-2 再履修英語科目の単位未習得原因

問題1：受講登録者数が非常に多い ⇔ 対策：受講登録条件変更＋原級復帰

このセクションでは、必修英語科目の単位未習得原因として考えられるいくつかの要因と、その対策について考察する。初めに、「再履修英語」の受講登録者数は非常に多い。開講初年度の2002年度、受講登録者数は既に2,200人以上で、さらに2006年度には未曾有の4,300人を超える異常事態に陥ってしまった。

そこで、その対策として、2010年度からは、経済学部・経営学部・理工学部・情報理工学部の全学部において、必修英語科目の単位を取得できなかった場合、原則的に原級復帰（翌年度以降に同一のクラスを受講すること）という措置を取り、「再履修英語」を受講できるのは3回生から、受講登録条件をさらに変更したのである。その結果、2010年度の受講登録者数は約半分の1016名となり、各学部が取った原級復帰策は、一定の効果があったと考えられる（図1参照）。以下の図3は、第3期 平均単位取得率を、図4は第3期の各回生の平均単位取得率を表している。

また、2015年度より経営学部がOICへ移転して4学部共通開講科目から3学部共通開講科目になったことで、2015年度より受講登録者数が1,000人を大きく下回ったと考えられる（図1参照）。但し、本論の執筆時期が2017年1月であることから、以下の図3および図4の2016年度のデータは、前期のみのデータである。

図3：第3期 平均単位取得率

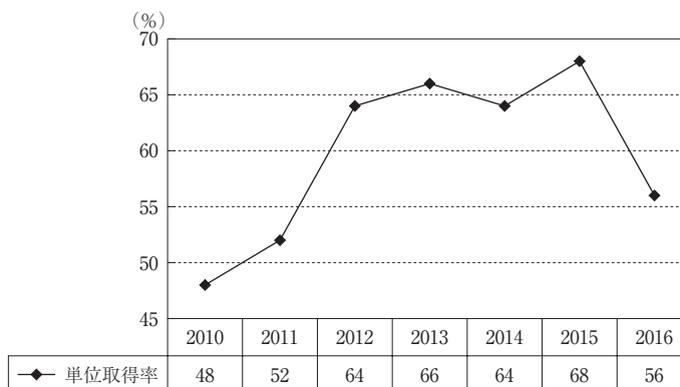
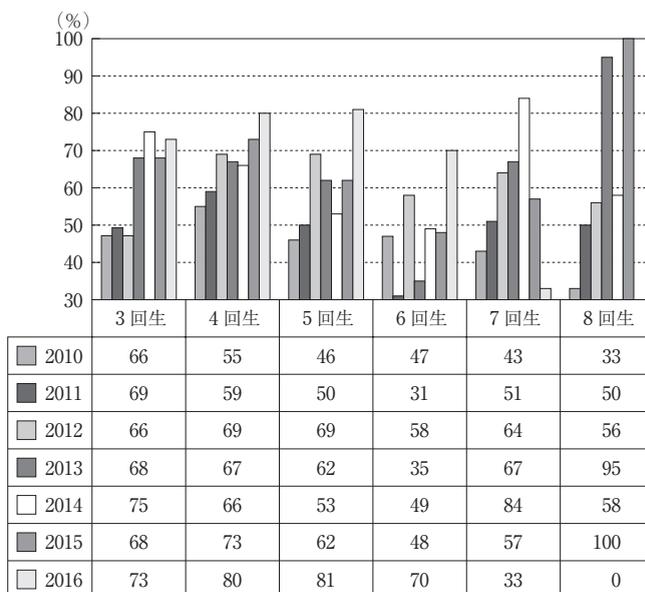


図4：第3期 各回生 平均単位取得率



問題2：評価方法 ⇨ 対策：評価方法の変更

開講初年度の2002年度から2011年度までの期間、「再履修英語」では、開講中に実施される小テスト6回と大テスト3回（合計9回）を必ず全て受験しなければならなかった。1つでも受験しなかった場合、その時点で不合格となり、単位を取得できなかった。この評価基準を作成した教員は不明だが、毎回の出席を促進する目的でこのような評価基準を設けたのであろうが、想像力が欠如していたと言わざるを得ない。というのは、この評価基準では開講早々、たった1回でもテストを受験しなければ、その後、全講義に出席し、60%以上の成績を取得しても単位は認定されず、不合格になった。不条理極まりない評価方法であったので、その結果、出席率はどんどん下がり、単位の回復には全くならなかった。この評価基準は、却って受講生の学習意欲を失くす原因となっていたので、この評価方法は2011年度をもって撤廃され、現在は以下の2つの条件を満たせば単位が取得できるよう改善されている。

- 1) 全15回の講義の内、最低2/3(=10回)の出席
- 2) 100%満点中60%の取得

現在の評価基準は、15回の講義中、基礎的な英語学力を確認するための試験が3回実施される(10%×3回=30%)。加えて、テキスト内容の理解と語彙・文法知識の定着を確認する小テスト(あるいは課題)が5回以上実施され、(5%×5回=25%)。さらに、出席状況の評価の対象とし、1週(1回)出席ごとに3%が加算される(3%×15回=45%)。「再履修英語」の場合は、必修英語科目とは異なる評価基準が適応されており、評価はCまたはF(不合格)のみである。

問題3：受講クラスの確定時期 ⇔ **対策：オンライン上での事務処理による迅速化**

2016年度現在、「再履修英語」科目は前期10クラス（月曜日～金曜日、各曜日2クラス）・後期8クラス（月曜日・火曜日・木曜日は各曜日2クラス、水曜日・金曜日は各1クラス）が開講されている。開講クラス数も多く、登録受講者数が2015年度から減少したとはいえ、それでもまだ700人を超えている。加えて、3学部統一科目であり、また重複受講が可能な科目という複合的な理由から、例年、開講時に受講生がどのクラスを受講するのかということを確定することが困難であり、それが最終的に確定する時期は第3週目になるクラスも発生している。

「再履修英語」の受講登録方法であるが、2016年度の場合、まず開講前である4/2～4/6の期間に受講生は、自分の希望する曜日の「再履修英語」のいずれかのクラスを選択し、オンライン上で履修登録を済ませておく。履修登録締切後に、1クラスあたりの定員（50名）を超過したクラスがあった場合、オンライン上で自動抽選が実施され、前期セメスター授業開始初日である4/7の05:30にはオンライン上で、各クラスの受講者発表がされる。よって、希望したクラスへの抽選に当選した受講生は、希望したクラスへ出席する。一方、抽選に外れた受講生は抽選発表の当日を含む4/7～4/25の期間に「追加募集」が実施されるので、言語教育企画課窓口へ行き、定員に達していないクラスを選択・履修登録をする必要がある。この追加募集は先着順で決定するので、たとえ抽選に外れたとしても開講初日である4/7に言語教育企画課窓口へ行き、定員に達していないクラスを選択・履修登録をすれば受講クラスが確定する。

しかし、現実には受講クラスが最終的に確定するのが第3週になる。第3週まで最終的な受講クラスが確定しないということは、すなわち第3週まで受講者数が確定しないことを意味するので、仮出席簿すら無い状況で、担当教員は受講者数が確定するまで、毎回全クラス用に配布印刷物を各50部準備しなければならない。さらに、毎週受講生が同一ではないので、クラス・ルールや単位習得に必要な条件説明、合計8回のテスト実施時期など、通常であれば第1週で終了するイントロダクションを第3週まで毎週毎週繰り返さなければいけないクラスも発生している。第3週まで受講生が定まらないことで、「再履修英語」科目担当教員には、必修英語科目には発生しないような問題が発生しているのである。

第3週まで受講者数が確定しない原因は、「再履修英語」の受講登録に来ない学生が非常に多いことが挙げられる。そもそも、たとえ希望したクラス受講の抽選に外れたとしても、開講初日である4/7に言語教育企画課の窓口へ行き、定員に達していないクラスを選択・履修登録さえすれば受講クラスが確定するのであるが、「再履修英語」の受講登録にさえ来ない学生が大勢いるのである。「再履修英語」を受講し、単位を取得しなければ卒業できず除籍処分となるにも関わらず「再履修英語」の受講登録にさえ来ない学生が大勢いるのが、現実なのである。希望したクラス受講の抽選に外れたとしても、開講初日である4/7に言語教育企画課窓口へ行き、定員に達していないクラスを選択・履修登録をきちんと済ませるような学生は、そもそも「再履修英語」など履修せず必修科目で単位を取得しているのである。このような理由から、「追加募集」の期間を開講第3週最終日としている。ただし、後期はこの範疇にあらず「追加募集」の期間は当選発表から数日間としている。

Ⅲ. おわりに：到達目標

「再履修英語」は、単位回復科目であり、本来は必修英語科目において、または原級復帰での単位取得が望ましいのはいうまでもない。しかし、現実的には「再履修英語」の受講者を0にすることはできない。2002年度の開講以来の当該科目の受講登録者総数は31,834名と、ついに3万人を超えた。今回、初めて必修英語科目の単位取得に至らなかった原因が何であったか、わずか100名分の回答ではあったが、今までは担当教員の推測の域を出なかった最大の原因であると思われた「出席不足」という要因が、推測ではなくデータとして得られたことの意義は大きい。ある特定の問題を改善・解消するためには、原因を明らかにすること無しには成し得ない。そのためにも今後も、定期的に「再履修英語」クラスで受講者や担当教員の理解と協力のもとにアンケートを実施し、必修英語科目で単位が取得できなかった原因を継続的に明らかにし、それらの情報を教員や必修科目・再履修科目受講生と双方が共有することで、「再履修英語」科目受講者を今以上に減少させることができると筆者は考えている。

経済学部では、例年、前期・後期の開始前に英語科目担当全教員を対象に英語担当者懇談会というオリエンテーションを開催しているが、その場で集積・分析した「再履修英語」科目のデータを開示し、情報を共有を図りたい。現状に甘んじることなく、受講者がより一層継続して、出席し続けるような仕組みや動機付けを我々教員は常に考えていく必要がある。「再履修英語の受講者数を減少させる」という目的を達成するためにも、今後も様々な方向から取り組んでいきたい。

Appendix 3

受講生のみなさんへ 上田真理砂です。以下、熟読して次回講義に備えて下さい。

〈重要なお知らせ〉

1. Test of Chapter 3 からは、ノートの持ち込みはできません。

〈次回講義予定内容〉

1. 課題回収 (=5%)
2. Questionnaire 回収
3. Test of Chapter 3 (=10%)
4. 返却物
5. Feedback of Questionnaire
6. 解答&解説

—— Time Permitted ——

7. Review of Listening Strategies

〈課題〉

1. pp. 40-46の知らない単語調べ
2. p. 41-C, p. 42-D & E, p. 44-K
3. p. 44 J (=5%) 添付の所定用紙を用い、ディクテーションをしてきて下さい。

〈試験情報〉

Test of Chapter 3 (=10%)

〈Office Hour〉

Office Hour とは、英語や留学など英語全般に関してどんなことでも、予約なしで飛び込みで質問できたり指導を受けたりすることができる時間です。後期の Office Hour: 木曜日 3 限
なお、木曜日 3 限が都合が悪い人は、希望する日時を第 3 希望まで記し、送信して下さい。

〈持参物〉

1. マーカー（色違いを 2 本）
2. 単語カード
3. イヤホン

〈質問がある場合は？〉

For further information and any enquiry, please send me an e-mail at marisa@ec.ritsumei.ac.jp

件名：Mon 1 / your name / 用件を簡潔明瞭に単語で。

上田真理砂（博士：言語文化）（専門分野：リスニング）

<http://research-db.ritsumei.ac.jp/Profiles/37/0003615/profile.html>

立命館大学 経済学部 教授 〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1

Office: 077-561-4817 (Ext. 7383) アクロスウイング 4F 433

References

- 上田真理砂 (2011)。立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおける英語リメディアル教育について—必修英語科目の単位未習得者—, 立命館経済学, 第60巻, 第2号, 104-111.
- 上田真理砂 (2015)。必修英語科目単位不認定者を対象とした英語リメディアル教育について—立命館大学びわこ。くさつキャンパスのケース—A Consideration about Some Problems of Remedial English Courses at Biwako Kusatsu Campus, Ritsumeikan University, 社会システム研究, No. 31, 109-124.
- 上田真理砂 (2016)。立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおける英語再履修教育について—必修英語科目で単位を習得できない原因と対策 その1 (第1期および第2期)—, 立命館経済学, 第65巻, 第5号, 314-325.